
言語研究センター共同研究

外国語学習・教育における レアリアの内容と位置づけに関する研究

堤 正 典

レアリアとは、当該の言語文化に関する知識のことで、その言語運用を支えるものである。このような知識がないと実際の使用においてばかりではなく、言語学習にも支障が生じる。外国語に接していると、文面上の意味は分かることは分かっても、文化的背景等を理解していないと実際の意味するところが分からないことは多々あり、軽んじることのできない問題である。

教育時に何もかも取り上げるわけにはいかないので、取舍選択し、導入にも順序があるのは、語彙や文法などの他の教育内容と同じである。また、使用している教材や学生の性質など、それぞれの教育現場ではそれぞれの事情も勘案しなければな

らない。したがって、我々にとっては、神奈川大学での外国語教育においてどのようにレアリアを取り上げていくかを具体的に検討していくことが必要となる。

特に、(ロシア語受講者には比較的多いのであるが) その言語が行われている地域に関する知識をほとんど持たない、もしくは大きな偏りがある受講者に対して何をどのように提示していくべきかの検討は急いで検討しなければならない。

昨年度までは、ロシア語教育のみの範囲内で研究を行ってきたが、2012年度からはフランス語教員の協力を得て、双方の教材等の比較という方法も取り入れることになった。

比較研究においては、それぞれの言語を教える際の様々な制約もあり、種々の異なりがあることが認められた（制約とは、例えば、ロシア語においては、日常的によく用いる重要な表現も、学習者に文法的な説明を行なって導入しなければならないのであれば、文法教育の順序からそう早い段階で取り上げるができないことがある。そうすると、教材とするテキスト・スクリプトに盛り込むことができる表現に制限がかけられ、必ずしも自

由には学習すべきレアリアを取り扱うことができないのである）。異なる言語の教育の比較から、そのレアリアの扱いを検討すると、種々の違いが浮き彫りにされる。さらに精査をすすめていく。

2012年度前期までメンバーであり、現在はロシアで教鞭をとる小林潔氏が、一時帰国した際に、現地での最新の情報等を盛り込みながら、ロシア語教育に関するレアリアについて講演をしてもらうことができたが、非常に興味深いものであった。
